

【ポスター発表】

家族介護者に関する情報把握について

ーホームヘルパーへのアンケート調査から課題を探るー

○ 関西福祉科学大学大学院研究生 氏名 松本 眞美 (8045)

キーワード：ホームヘルパー・アセスメント・家族介護者

1. 研究目的

ホームヘルパーは利用者の居宅を訪問する専門職であり、居宅において瞬時に情報把握を行い、支援を行っている。家族介護者の介護負担感の軽減は社会問題となっているが、そのような観点からも、支援の過程において、利用者だけではなく、家族介護者の情報把握なども重要な視点であると考えられる。各職能団体等のアセスメント様式が活用されているものの、情報把握の詳細については関係する専門職の専門性に委ねられている。

ホームヘルパーの情報把握に関する先行文献は、「ホームヘルプ固有のアセスメントと介入の方法」(須加 1999)があるとしたものや、情報把握の職種間比較の調査結果からホームヘルパーには「家族の介護状況や社会資源の利用状況を把握する必要があると考えられ、家族アセスメントの視点が必要」(松井ら 2008)としたものなどがある。そこで、ホームヘルパーの家族介護者に関する情報把握の実践や意識を調査することにより、ホームヘルパー固有のアセスメント項目や、関連する要因が明らかになると考えた。

本研究の目的は、ホームヘルパーが行う家族介護者に関する情報把握の現状を明らかにし、関連要因を検討することでホームヘルパーの「家族介護者に関する情報把握における課題」を考察することである。

2. 研究の視点および方法

本研究では、居宅における場を介したホームヘルパーと家族介護者の関係性に着目する。

ホームヘルパーと家族介護者に関連する調査を行なった先行文献は数点みられた。「生活の『場』を活かした訪問介護業務におけるヘルパーの家族支援の在り方」を調査(松本 2014)したものや、家族支援に関する16の質問項目を作成している「ホームヘルパーの認知症利用者に対する情報収集の特性」の調査(山村 2012)などである。そこで、職能団体のアセスメント様式や、法令による指導項目や、現場のホームヘルパーへのインタビュー等から、家族介護者の情報把握に関する調査の質問項目を64項目抽出した。援助技術については「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs」(藤本・大坊 2007)の24項目を作成者の承諾を得て使用し、合計88項目の質問紙調査票を作成した。

調査方法は、A県の「介護サービス情報公表センター」の2014年7月現在のデータを閲覧し、全介護保険訪問介護事業所3,423件から無作為抽出法で200件の事業所を抽出し、当該事業所の2名、合計400名を対象に郵送調査を実施した。情報把握については、「非常によくあてはまる～全くあてはまらない」の6件法、コミュニケーションスキルについて

は「かなり得意～かなり苦手」の7件法で回答を得た。調査期間は2014年7月末日～8月末日であった（有効回収率は26%. N=104）。

分析方法は、家族介護者の情報把握尺度を因子分析し抽出した4つの主因子「積極的な介護」「危機予防」「情報把握共有の方法」「ストレス」を独立変数とし、援助者の思いの「家族介護者のイメージ」「業務の質との関連」、コミュニケーションスキル尺度は作成者の命名した「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6下位尺度、基本属性（年齢、経験年数、勤務形態、資格、家族と関わる訪問時間、研修回数、家族関係の研修回数、介護経験の有無）を説明変数とし、説明変数が独立変数に及ぼす要因を明らかにする為に重回帰分析を行なった。統計解析にはIBM SPSS STATISTICS 22を使用した。

3. 倫理的配慮

本研究は、関西福祉科学大学倫理委員会にて承認を受け、日本社会福祉学会研究倫理指針に則って実施した。対象者に研究の趣旨や匿名性の確保、データの管理方法、研究目的以外でデータを使用しない旨を文書で説明した。

4. 研究結果

重回帰分析の結果、「積極的な介護」に対して有意な関連は「研修回数（ $\beta = -0.565$ ）」「解読力（ $\beta = -0.499$ ）」であり、「危機予防」に対しては「経験年数（ $\beta = -0.450$ ）」「勤務形態（ $\beta = -0.379$ ）」であり、「情報把握共有の方法」に対しては「業務の質との関連（ $\beta = 0.356$ ）」「ストレス」に対しては「家族と関わる訪問時間（ $\beta = -0.370$ ）」であった。コミュニケーションスキルの下位尺度平均得点は「他者受容（平均 5.55, SD3.66）」「関係調整（平均 4.65, SD0.90）」「解読力（平均 4.46, SD0.68）」の順であり、「自己主張（平均 3.83, SD0.67）」は最下位であった。コミュニケーションの基本スキル「解読力」で相手の考えや気持ちをしぐさや言葉から正しく読み取り、上位の対人スキルである「他者受容」によって相手の意見や立場に共感することがやや得意であるという結果だった。

5. 考察

経験年数、勤務形態、家族と関わる訪問時間が長くなると、家族介護者と一緒にいることで、ストレスや虐待の恐れなどの把握につながり、解読力の得意さが顕在化しにくい家族介護者の状況を把握しやすくしている。家族機能についての理解が深まれば、より把握力が向上すると考えられる。しかし、年齢や介護経験や経験年数が介護の質に関連していると思えば思う程、情報把握や共有をしなくなるという結果は、経験知による実践を優先していることを意味している。関係する専門職間での情報共有が重要であることや、経験知を普遍的な技法とすることが必要であると考えられる。受容と共感がやや得意という結果であったが、研修回数に関して有意な関連があったことから、ホームヘルパーに対するコミュニケーション技術や家族アセスメント等の研修を充実させていくことが、情報把握力の向上につながるのではないかと示唆される。ホームヘルパーに対する研修の在り方や情報共有する体制作りなどについて検討していくことが今後の課題である。